<報告>学生がつくる学びの場：プチチャレ「お聖さんとゆかいな仲間たち」を例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 嶋崎, さや香 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4613

報告

学生がつくる学びの場

―プチチャレ「お聖さんとゆかいな仲間たち」を例に―

嶋　崎　さや香

キーワード

アクティブラーニング・主体的な学び・田辺聖子

一．はじめに

学生の主体的な学びは、現在の大学教育における重要なキーワードになっている。講義を聞き知識を覚えるだけでなく、知識を活用して深く考え、表現し伝えることを含む活動は、大学での学びの重要な一要素として定着しつつある。

こうした主体的な学びはアクティブラーニングといわれるが、それはどのように定義されているのだろうか。例えば、中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』では、それを次のように定義している。

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。[1]

アクティブラーニングとは、教員が主体となって行う教育ではなく、学生が主体となって行う学びであり、そうした学びから学生の多様な能力の育成を目指すものであることが分かる。

このような学生の主体的な学びや活動の重要性については、大阪樟蔭女子大学でも共有されており、その支援体制も充実している。例えば本学に設置された、くすのき地域協創センターがある。これは、もとは大学と地域社会の連携を目的に設置された組織であり、このセンターを中心に「学生が自主的に行う課外活動や資質向上のための研修・研鑽の活動に対し、資金やサービスを提供し、その継続的な運営」を行うためのサポート体制が組まれている。[2]

こうした取り組みの一環として、二〇一六年春より「プチチャレ」が新しく立ち上げられた。これは、学生が主体的に学び、物事に取り組む活動を大学が資金面から応援するプロジェクトである。そのなかで教員は、学生たちを指導するのではなく、彼女たちの活動を支援するアドバイザーとしてあるに過ぎない。

本稿では、プチチャレに採用された「お聖さんとゆかいな仲間たち」の活動を、アドバイザーとしての立場から報告する。

二. 活動開始まで

二. 一　プチチャレ応募にいたる経緯とメンバーたち

まず、どのような流れで「お聖さんとゆかいな仲間たち」が結成されるにいたったのかを説明する。

二〇一六年四月頃、本学国文学科の中周子教授より、学生の主体的活動を援助するプチチャレの募集があるため、本学OGである作家、田辺聖子氏の作品を扱った読書会などを企画してみてはどうかとお声がけいただいた。

当時、稿者は図書館や読書を軸に、学生を中心とした活動ができないかと考えていた。格好の案をタイミング良くいただいたため、試みに授業で呼び掛けたところ、国文学科の学生六名が参加したいと申し出てくれた。

彼女たちはなぜ参加を申し出てくれたのだろうか。その理由として最も多かったのは、授業で田辺作品に触れていて関心があったためということである。この他にも、ゼミやサークル以外のグループ活動に参加してみたかったという学生や、読書会に興味があったと答えてくれた学生もいた。このような経緯で会は結成された。

集まったメンバーで活動を始めるにあたり、まず会の名称を決めた。いくつか案が出されたが、最終的に「お聖さんとゆかいな仲間たち」に落ち着いた。これは田辺聖子氏への親しみを込めてという意味で「お聖さん」という言葉を用いたいという学生たちからの提案であった。（以下、「ゆかいな仲間たち」と省略する）

二. 二　メンバーの紹介

ここでメンバーと担当役割について紹介しておく。いずれも国文学科の学生であるが、四年生と二年生が参加している。四年生は卒業論文や就職活動などがあることから、負担の少ない書記を担当し、代表や会計などを二年生が担当している。

四年生　近藤さん（書記）　藤江さん（書記）
二年生　塩谷さん（会計）　田畑さん（副代表）
　　柘植さん（編集）　渡辺さん（代表）

二. 三　「ゆかいな仲間たち」の活動目標

「ゆかいな仲間たち」で活動するにあたり、以下の目標を定めた。

一、田辺作品を深く読み込むこと。
二、作品の読みを様々な人と共有すること。
三、文学館の認知度を学内外で高めること。
四、田辺聖子作品の魅力を伝えるため、学外の人を招いてイベントを開催すること。

以上四点を当面の活動目標に据え、プチチャレに応募するために、次のような小文を作成した。

授業を通して田辺聖子さんの作品を知り、また学内に田辺聖子文学館があることを知りました。そうした中でもっと田辺文学を読んでみたい、また自分以外の人たちと一緒に楽しんでみたいと考えるようになりました。大学にある田辺聖子文学館には、作品のみならず作家に関する様々な資料も保管されています。こうした所蔵品などを活用し、この取り組みを通じて、まだ田辺聖子さんのことをあまり知らない地域の方々や学生が田辺聖子さんについて知ることのできるようなイベントにできればと思います[3]。

六月初頭にくすのき地域協創センターより、プロジェクト採用の通知が届き、二一、三四〇円の援助を受けることが決定した[4]。これによって「ゆかいな仲間たち」は、二〇一七年一月の田辺作品を用いたイベント開催を最終目標として、月に一度の読書会を行い、イベント成功に向けて協同し研鑽を重ねることになった。

三、活動内容

ここでは、プチチャレ採用後の活動内容を、大きく四つに分けて報告する。

一、週一回のミーティング
二、月一回の読書会
三、「田辺文学を読む会」への参加（文学館主催の読書会）
四、伊丹市立図書館の見学会（「トリプル周年記念展」）

三・一　週一回のミーティング

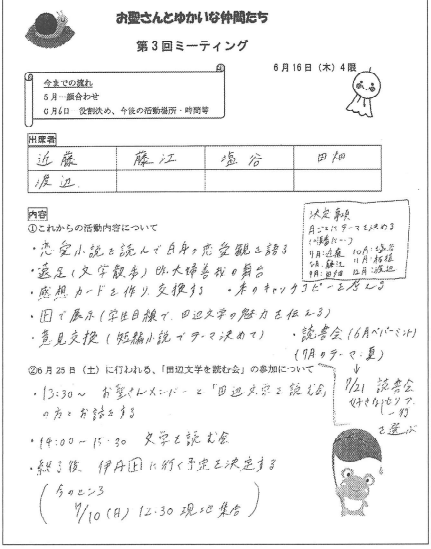
まずミーティングについて説明する。グループ活動をすすめるためには、定期的なミーティングを行うことが必須である。学生の空き時間を調整した結果、前期は木曜日四コマ目、後期は火曜日四コマ目にミーティングを行うことにした。場所はアドバイザーの研究室、本学図書館の特別研究室、セミナールームのいずれかで行った。

初回は顔合わせと自己紹介、二回目に役割の決定、メーリングリスト（以下、ML）の作成、三回目に読書会担当者の決定と、一月イベントについて話し合った。大まかにではあるが、最初の数回で一年間の活動の流れを決定したことになる。

個別のミーティングでは、代表の渡辺さんが毎回議題を記したレ

ジュメを作成し、司会を務めた（資料①）。ミーティング内容は書記の近藤さん、藤江さんがホワイトボードにまとめ、MLに添付して欠席者との情報共有と記録の作成を行った。

資料① ミーティングレジュメ



こうした定期的なミーティングの他に、プチチャレを主催するくすのき地域協創センターへ提出する書類の作成や報告内容の確認、予算の執行状況の報告、イベントで配布する冊子の企画と編集など、様々なことが議論されていた。各回の主な議題は次の通りである。

五月三〇日	顔合わせ
六月 六日	役割決定、連絡方法（メーリングリスト）の周知
一六日	読書会担当者決定、年間活動計画について議論
二二日	年間活動計画表の作成
七月 九日	伊丹市立図書館「バラ色の聖子と青色の輝」見学
一四日	見学会報告書の作成担当決定、夏休みの活動計画
九月 九日	イベント内容の検討
二七日	イベント時の配布冊子の検討
一〇月 四日	イベント内容と配布資料の検討
一一日	イベント内容を決定
一八日	イベントのチラシと応募受付メールの作成
二三日	チラシ配布と応募メール対応の検討、冊子編集
二五日	ポスター作成、冊子編集
一一月 一日	イベント内容の詳細を検討、冊子編集
八日	『私本・源氏物語』朗読箇所の選定
一五日	『私本・源氏物語』朗読練習
二二日	ポスター掲示とチラシ配布の打合せ
一二月一三日	配布冊子の校正
二〇日	配布冊子の最終校正
一月一〇日	イベント打合せ
一六日	イベント通し練習（一）

一七日　冊子印刷と製本（一）
二四日　冊子印刷と製本（二）
二六日　イベントの通し練習（二）
二八日　お聖さんを楽しむ会（朗読＋読書会の報告会）

資料②　ミーティングの様子

ルームで行った。開催頻度は土に月に一回、土曜日の午後か、参加者全員が講義を受けていない火曜日の一二時半から一四時に行った。読書会を始めるにあたって、事前に次の様なルールを作成した。

・必ず一人一回担当すること。
・担当者がテーマや作品を決めること。
・一時間半を持ち時間とすること。

読書会の日時、担当者、取りあげたテーマ・作品は次の通り。

開催日	担当者	テーマ・作品
七月二一日	近藤	「夏」・『恋にあっぷあっぷ』他
九月一七日	藤江	『ジョゼと虎と魚たち』を読もう
一七日	田畑	「女」・『嫌妻権』『ちさという女』他
一〇月一九日	塩谷	『私本・源氏物語』を読もう
一一月二二日	柘植	『田辺写真館が見た〝昭和〟』を読もう
一二月　七日	渡辺	『とりかえばや物語』を読もう

続いて読書会の流れを概観する。まず会の担当者から事前に読書会の日時と場所、テーマ（作品）が提示される。左に掲載したレジュメは、第一回の担当者（近藤さん）が配布した予告レジュメである。

三．二　読書会（メンバーのみ）

次に、「ゆかいな仲間たち」のメンバーのみで行った読書会について説明する。場所はアドバイザーである稿者の研究室と、セミナー

読書会の方法としては、次の二つの形式がある。一つは、担当者が決めたテーマ（例：「夏」「女」）にそって田辺氏の作品を選び、その理由や紹介したい言葉を予め決めてから、読書会で発表する方法である。二つ目は、担当者が決めた作品を各自が通読し、読書会に参加する方法である。

最初の数回の読書会では、座る場所から時間配分、また出された意見の集約方法まで、試行錯誤といった様子であった。アドバイザーは指示する立場にないため、学生がどのように活動するのか見守っていた。

資料③　読書会予告レジュメ

第一回　お聖さんとゆかいな仲間たち　読書会

1. テーマ「夏」　夏というワードが出てくる本をひとつ選んでください

あと一週間しかないからムズカシイよ！という方はこちら！から一つ選んでもOK
『金魚のうろこ』『休暇は終わった』『風をください』
『夢のように日は過ぎて』『蕭苑の雨』『9時まで待って』

2. その本を選んだ理由

例：『恋にあっぷあっぷ』
最初に題名に惹かれて、手にとってみました。
夫がいるのに、パトロンをもつアキラ、なんだか羨ましい…
そんな気持ちで選びました。

3. 好きなセリフ　or　好きなシーン

例：今まで伝票処理が私に一番合っていると信じて仕事をしていた主人公のアキラが、
ブティックで働くようになって、自分の新しい一面を見つけるシーン
「私は、接客業というのがきらいではなかったのだ！」

選んだ理由：自分の新しい一面を見つけるというのは難しいものなので、自分の中に眠る新しい一面を見つけることができたアキラを応援したくなりました。

③は、どちらかひとつでも　両方でもOK！
レジュメを作る必要はありません
①～③までの内容を書いたメモなどを用意しておいてくださいね！

来週、よろしくお願いします(^^)

しかし、アドバイザーからの指示がない中でも、担当者がテーマにそった本を紹介する、あるいは指定した作品について解説し意見を述べるなど、学生たちが自ら考えて積極的に会を主導していく様子が見て取れた。担当者は司会者の役割も兼ねており、自身の発言が終了すると、他の参加者に発言を促す、あるいは様々な意見を集約するなどの役割を担っていた。

さらに、参加した学生も担当者からの問いに積極的に反応しながら、会をもり立てている様子も随所に見られた。感じたままに本を紹介し、楽しみながら語り合うことが出来る場を確保するうえで、初回から大変有意義な時間を構築していたように感じた。

三・三　「田辺文学を読む会」への参加

「ゆかいな仲間たち」の活動として、「田辺文学を読む会」への参加についても説明する。「田辺文学を読む会」は、二〇一一年に中周子教授と国文学科卒業生四名によって作られた読書会である。発足以来、毎年四回～五回の読書会を開催してきた実績を持つ。読書会にはメンバーだけでなく、一般の方も男女問わず参加することができ、学外にも広く開かれた会である。

参加したのは、第三〇回「恋愛短編小説を読む」と、第三一回「歌子さんシリーズより『姥ときめき』を読む」である。どちらも本学図書館三階の視聴覚教室にて、土曜日の午後に開催された。

第三〇回は、国文学科ＯＧである山下かおり氏が「案内人」となり、『薄荷草の恋』を取りあげて、作品への感想や疑問、時代背景

について意見を交わし、読みを深めていく方法がとられていた。

第三一回も、本学科OGの本間悦江氏が「案内人」となって開催された。この会は作品を輪読しながらその表現を味わい、理解を深める方法で進められた。そのため、登場人物の関西弁を織り交ぜたセリフの軽妙さを十分に感じられる会となっていた。

学生たちが学内で日常的に関わるのは、同年代の友人と教員に限られる。しかし、今回参加した「田辺文学を読む会」は、年代も性別も異なる学外の方が中心の読書会であった。このように、人生経験も、読んできた作品数も圧倒的に違う人びとに囲まれながら、自分の意見を述べ、質問をすることは、大変貴重な体験となったと考えられる。

また、発足して間もない「ゆかいな仲間たち」が、読書会の開き方や進め方などを学ぶうえでも、大変有意義な体験となっている。例えば、テーマを設定して、好きなセリフや場面を選び語り合うといった方法は、この「田辺文学を読む会」への参加を通して学生たちが学び取った方法である。

三・四　伊丹市立図書館の見学会

最後に、学外での活動について報告する。兵庫県伊丹市では、二〇一六年六月二二日から七月一七日まで、市在住の田辺聖子氏と宮本輝氏を取りあげた特別展「バラ色の聖子と青色の輝」を開催した。場所は伊丹市立図書館ことば蔵である。

この特別展には、本学の付属施設、田辺聖子文学館所蔵の直筆色紙や短編小説の直筆原稿（複製）などが展示されていた。文学館の所蔵品が図書館という公共空間に貸し出されて、どのような仕方で来館者に提供されているのか。また、もう一人の作家、宮本輝氏とどのような結びつけ方をした展示を行うのか。さらに、ことば蔵の二階に常設された「伊丹作家コーナー」では、作品の展示にどのような工夫が見られるのか。こうした点に着目しながら伊丹市立図書館ことば蔵を訪ね、見学会をおこなった。

ここで、当日の様子を少しだけ振り返っておく。

見学会は七月九日の土曜日に実施した。一二時三〇分に大学に集合し、現地に到着したのは一四時三〇分であった。当日、代表の渡辺さんより、日程、経路、特別展の情報、注意事項の書かれた冊子が配布された。また、事前のミーティングで、誰が、展示のどの部分について報告するのか、役割分担を決めて臨んでいたようである。参加した学生からは、次の様な感想が聞かれた。

・壁際の本棚に田辺聖子さんの本が天井近くまで展示されていた

のですが、その一つ一つを手に取って読むことができるので、とても興味を持ちやすい展示方法だと思いました。伊丹図書館も面白いイベントが多くあるのでまた行きたいです。（近藤）

・今回、伊丹市立図書館に行き、田辺聖子さんについて知識を深めることができました。また、同時に展示されていた宮本輝さんについても知ることができたり、図書館の内装や伊丹の情緒ある街並みの素晴らしさを感じることができたりと貴重な経験をすることができました。こういった機会はあまりなかったので、とても良い体験となりました。（藤江）

・今回の展示を見て、田辺さんの頭の中をのぞくことが出来たと思います。文学に、言葉にひたむきでスポンジのような吸収力をもつ田辺さんは、高齢であるにもかかわらず、「文学少女」という言葉がピッタリだと思いました。私も年をとっても田辺さんのようにたくさんの文学、芸術に出会いたいです。（柘植）

・バラ色の言葉を伝えるお聖さん伊丹の地にて紫に輝く（渡辺）

このように、注目する部分も、感じることも、その表現方法も多様である。

また、見学先が図書館であったことから、その施設の雰囲気やイベント企画に関心を示す学生もいた。例えば塩谷さんの「こんな図書館が近くにあればいいなぁ～と思いました」や、田畑さんの「伊丹図書館の多彩な企画と共に、お聖さんの魅力に少しでも触れることができて良かったです！」などである。

学生たちが感動したこの伊丹市立図書館は、その四ヶ月後に、「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー二〇一六」を獲得している。これは、国内の先進的な活動を行う図書館に贈られる賞であり、見学会は期せずして、最先端の図書館を体感する機会にも繋がった。見学会が終了したのは一七時である。

四、おわりに

―成果および一月のイベント「お聖さんを楽しむ会」について―

最後に、活動成果について報告する。「ゆかいな仲間たち」は六月のプチチャレ採用以降、六名の学生によって活動を行ってきた。特に、一月のイベント開催に向けて、定期的なミーティングの設定、連絡方法や情報共有の確立、企画立案から実行に到るまでの計画など、いくつもの活動を並行して進める必要があった。

また、実際に読書会を重ねることで、田辺氏の作品を読み、その読みを深める活動も行ってきた。テーマにそって作品を選ぶこと、作品に対するメンバーの意見を聞き、議論を発展させること、こうした文学作品へのアプローチについても体験を重ねている。

さらにグループ外の人々への報告や依頼、さらに交渉などの機会も多かった。例えば、田辺聖子文学館学芸員の住友元美先生や山縣みさを先生、図書館司書の丸谷初江氏をはじめ職員の皆さん、くすのき地域協創センターの皆さん、国文学科の諸先生方である。

さて、すでに冒頭で確認したように、アクティブラーニングとは「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力」を育成する「学修」である。例えばミーティングでは、情報を共有し最善の方法を判断するための理解力や判断力などの「認知的」能力が求められる。

また読書会では、作家や作品などに関する知識や教養はもちろん、自分の理解や読みを他者に伝える力や、作品を解析する力も身についているだろう。さらに、コミュニケーション能力について言うならば、メンバー同士のみならず、グループ活動でお世話になった方々やアドバイザーとのやり取りも、こうした能力を培う糧と言えるだろう。こうした活動は、教員が一方的に知識を伝達する中では得られない体験と思われる。

以上のように「ゆかいな仲間たち」のメンバーは、結成からの九ヶ月間、自分たちの力で様々な活動を立案し、実行し、報告してきた。こうした彼女たちの体験は、平常の講義やサークル活動ではなかなか得難い貴重なものであったと思われる。

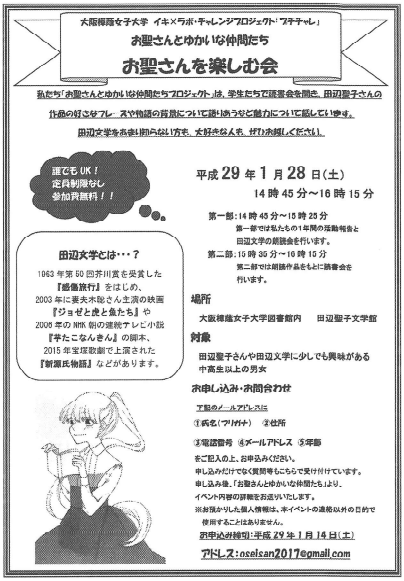
さて、「ゆかいな仲間たち」の活動の集大成として、大学内外の人々にたいして「お聖さんを楽しむ会」を開くことはすでに述べた。内容は次の様なものである。

イベント名：お聖さんを楽しむ会
開催日：二〇一七年一月二八日（土曜日）
開催場所：本学図書館三階、視聴覚室教室
テーマ：田辺聖子さんの作品の魅力について語り合う
（『私本・源氏物語』の朗読会と、読書会について発表予定）

授業の合間をぬって、イベントのための準備、練習に励んでいる彼女たちの成功を祈っている。

「付記」「ゆかいな仲間たち」のアドバイザーを務めるにあたっては、特に中周子教授、住友元美先生、山縣みさを先生、丸谷初江氏、くすのき地域協創センターの皆さんにご指導ご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

資料④　お聖さんを楽しむ会のポスター



注

1　中央教育審議会、二〇一二年、三七頁。

2　くすのき地域協創センター：（http://www.osaka-shoin.ac.jp/univ/social/kusunokicenter/）最終確認日：二〇一七年一月一〇日

3　くすのき地域協創センター（http://www.osaka-shoin.ac.jp/univ/news/一〇一六/二〇一六〇七〇七/）最終確認日：二〇一七年一月一〇日。

4　予算内訳は、消耗品費（イベント冊子作成費用等）一一、四二〇円、交通費（伊丹市立図書館見学のため）九、九二〇円。合計金額は、二一、三四〇円である。

5　田辺聖子『薄荷草の恋』講談社、一九九五年。